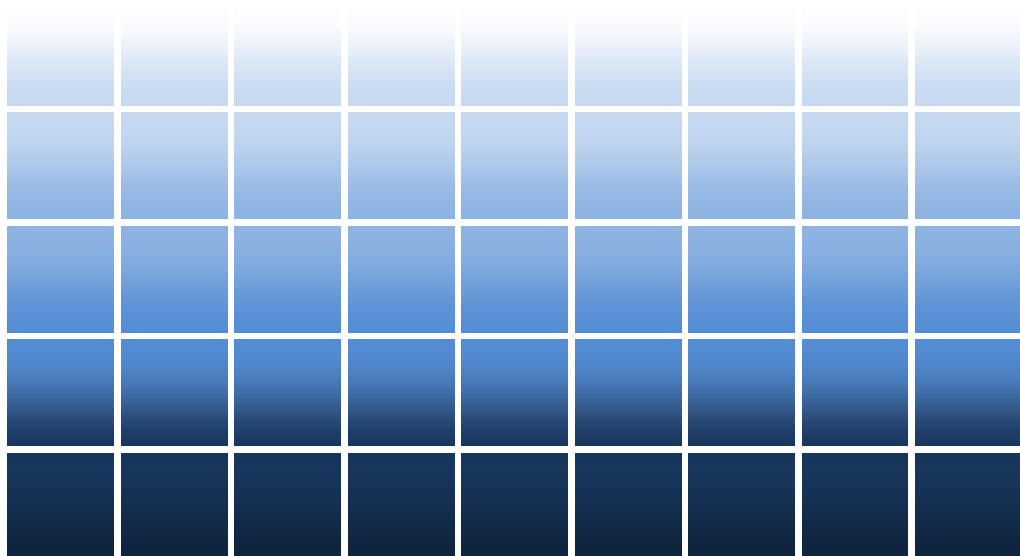


森の魔法使いと山の河童と、時間を停めた星の琥珀。
星の塵埃降り下町の河童と、時間と記憶と香の琥珀。



The only way of discovering the limits of the possible is to venture a little way past them into the impossible. Any sufficiently advanced technology is indistinguishable from magic.

ホモイは玉を取りあげて見ました。玉は赤や黄の焰ほのおをあげて、
せわしくせわしく燃もえているように見えますが、実じはやはり冷た
く美うつくしく澄すんでいるのです。
目にあてて空にすかして見ると、もう焰ほのおはなく、天の川が奇麗きれい
にすきとおっています。

目からはなすと、またちらりちらり美うつくしい火が燃もえだします。

——宮沢賢治 「貝の火」



1

——”図書館ではお静かに。”

本棚の隅にピンで留められた注意書きはすっかり色褪せて、日毎の闖入者が日常になったことを知らせていた。

湖畔に佇む悪魔の館の、地下に位置する大図書館。書籍の大峡谷といった様に見えるほどに巨大な本棚の傍ら、10人掛けのテーブルには今日も賑やかに少女たちの姿があった。

この書窟の主である七曜の魔女、司書を務める使い魔、自称、普通の白黒魔法使い——と、ここまではいつもの顔ぶれだが、館の主である吸血鬼姉妹の姿までがここにあるのは珍しい。

「……待てパチュリー、そこは少し異論があるぜ？」

「どうかしら。貴方の説よりは合理的だと思うわ」

机の上に山と積まれた本を所狭しと広げ、熱心にペー지를捲っては議論を交わす魔女たちの宴。そんな中、悪魔の妹・フランドール・スカーレットは現在一番のご執

心である森の魔法使い、霧雨魔理沙の隣の席で、読書会の様子を眺めていた。

「……………」

ちやっかり魔理沙のところが帽子を被り、いつぱしの魔女気取りなのが微笑ましい。

時折、体裁を気にするレミリアが妹の不法法を窘めるが、上機嫌のフランドールは魔理沙の傍を離れようとしない。畸形の翼をばたたと振っては、魔理沙の椅子の背もたれに飛び乗って、本に埋め尽くされたテーブルを睥睨する。

「……あれ？」

二人の魔女が舌峰をぶつけ合わせる中、ひょこんと魔理沙の肩上からその手元を覗きこみ、フランは声を上げた。

いつもならこの図書館で読書会があるとき、魔理沙達の広げている本には、頁一杯に難解きわまりない文字がびっしりと並んでいるのが常なのだが、今日の机の上はやや趣が異なる。

古びた装丁の頁の上を占めているのは、牙や鱗を持ち、碧色の肌をした巨躯を描いた絵^{イラスト}姿だったのだ。

「ねーねー、魔理沙。これなに？」

魔理沙の膝の上に身体を預け、本を広げる腕の間から

によきつと顔を出して、フランドールはその珍妙な生物を指さした。

「^{Dibrythia}「よ」
「恐竜」

机の向かいで、やはり同じような図鑑を広げていたパチュリーが小さな咳と共に顔を上げる。

何事にも動じず感情の起伏を見せないのが常の魔女は、珍しく眼鏡の向こうにある紫の瞳を珍しく興味に色づかせていた。

「だいのさうりあ？」

「ええ。ずっと昔、この地上に栄えていた四足鱗の生物のことね。これはその復元図を集めたものよ」

「昔って？ 私が生まれたくらい？ ……でも、見たことないわ、こんなヘンなの」

「いんや。フランが見るには今の二十万倍くらい長生きしてないとな。何億年も昔のことだ」

「……………」

億、と言われてもいまいちピンとこなかったのか、フランはむむむ、と眉をよじる。

「お姉さま、知ってる？」

「まあ、名前くらいはね」

悠然と紅茶のカップを傾け、答えるレミリア。

「……ほんとに？」

「もちろんよ。昔にぶちのめしたこともあるわ。フランは小さかったから覚えていないかもしれないけど」

明らかに信憑性に欠ける姉の言葉に、フランは怪訝な顔をするが、レミリアは気にせずふふんと羽根を揺らし、尊大に腕を組んでみせる。恐らく妹の手前、知らないとは言えないのだろう。

紅魔の館の主は口元を歪め、図鑑に見開きで描かれたイラストを紅い爪でつついた。

「しかし、魔女が雁首揃えてこんなもの眺めて、全体何が楽しいんだ？ どれも骸骨^{スケルトン}ばかりじゃないか。アンデッドでも作るなら墓暴きでもしてた方が幾分建設的だろうよ」

「それは骨格標本よ。実物はこれ」

パチュリーはこほ、と小さな咳をしながら、やや乱暴に図鑑を手にとった。鼻に尖った角をもつ、碧鱗の四足恐竜を載せたページを開いてレミリアの眼前に突き付ける。

「^{「イグアナの歯」}「？ どうにも締まらん名前だな」

「レミィの趣味には合わないかもしれないわね」

「……なあパチエ、言いたいことははっきり言ったらどうだ？」

図鑑を鬱陶しげに払いのけ、不機嫌に喉の奥で唸り声

をあげる館の主。

そんな友人の態度に、パチュリーはこれだからと言いたげに一言転送の呪文を呟いて、レミリアの放り捨てた手元に図鑑を引き寄せる。

「夜貴が聞いてあきれるわ。とんだ狹量。吸血鬼は死人の親玉だから、死に損いのことしか考えられないのね」

「塚人や屍解仙と一緒にしないで欲しいもんだね。パチュエ。このツエペシエの名に連なる不死なる紅き夜の王を」

お互い譲らず引かず、とうとう言い合いを始めるパチュリーとレミリアの二人。

「……また始まったか。飽きないもんだな」

「ほっとしましよ、魔理沙。それよりこれの事、もっと教えてちようだい？」

呆れる魔理沙の膝の上に、フランがびよんと飛び乗る。

「ん。そうするか」

「わーいっ♪」

図鑑のページをめくり、赤や緑の鱗をもつ巨大な生物を見つけては、これは？ これは、と名前を聞くフランドルの様子は、まるで無邪気な子供のよう。

パチュリーに袖にされた格好の魔理沙も、気分転換にそれに付き合うことにする。

そんな微笑ましい光景の隣で、五百歳の吸血鬼と百年

を遥かに超えて生きる魔女の大人げない言い合いはなおも続いていた。

「……はん。大層な名前を付けてるが、要は馬鹿でかいトカゲだろう。そんなに有難がるものでもないさ」

「いえ、馬鹿にしたものではないわレミイ。これはとても興味深い資料なのよ。吸血鬼を信じなくなった外の世界でも、この「恐竜」の存在は歴史的な事実として残っているということなんだから。

考えてみて。何千万年という期間を経てなお、この古代生物はその存在を伝えられ、創世記の解釈にすら影響を及ぼしているのよ？ そういった意味では、吸血鬼より不死に近い存在と言えるわね」

「……竜相手なら、多少譲歩も考えてやってもいいだろうがね」

熱弁を振るうパチュリーに、レミリアはますます不機嫌になる。

そんな友人の胸の内を知ってか知らずか、七耀の魔女は机上に爪や骨片といった化石標本を並べ出した。

「その在り方の違い、生態系の多様さ。これも特筆すべきものだけれど、なによりも目を引くのはその巨大さね。神話や伝承にある龍や巨人とは全く別の存在であるにも関わらず、生物分類として外の世界にもこんな体格をし

た生物が実在していたというのは驚愕の事実よ。

挙句、現在まで生存している種までいるらしいから、さらに驚きね。……そういえば、レミイのご執心だったモケーレだかもこの恐竜の生き残りという説が濃厚らしいわ」

「パチエ、やっぱり喧嘩を売ってるのか？」

牙を覗かせるレミリアだが、パチュリーは眼鏡のレンズを興奮に薄く曇らせて、ばん、と広げた図鑑の一面を示す。

見開きのページの上では、頭のとっぺんに鼻の穴を開けた珍妙な四足の巨躯が、尻尾を振り上げ首を振りかざして大地を踏みしめていた。

「これを見て。この、プロントサウルス 竜という種——種名から推

察するに雷精の性質を備えていたのだと思うけれど——この種ですら体長30m余。アンフィコエリ阿斯・フラギリムス種に至っては脊椎のサイズだけで2m。全長では60mを超えるのよ」

「ろくじゅうメートルって、どれくらい？」

「そうだな、大体」

ひよい、と魔理沙は膝上のフランを抱えて椅子を立ち、そのまま背中にも肩車をした。わ、と顔をほころばせるフランドルを見上げて、

「この……30倍くらいか？ 高さで言うなら二十階建てだな」

「じゃあ、紅魔館より大きいんだ！」

中から見回せばそれこそ巨人でも暮らせるような吸血鬼の館ではあるが、それは何事も完璧な従者が距離や時間を少々いじっているからこそのもので、敷地面積はさほど広大というわけではない。

館で一番高い時計塔の屋根でも、地上からは十階そこその高さだろう。天井を見上げるようにして、フランドルはきらきら目を輝かせる。

「すごいね、魔理沙っ」

「フランも気に入ったのか？」

魔理沙の問いに、悪魔の妹はうんつ、と笑顔でうなずいて、

「とつても壊し甲斐ありそうだもん!!」

「あー、フラン、その辺なんか違うもんなのか？」

そう言えば隕石も一発だったな、と思い出しつつ、そもそも物事の凄さの基準をそれで図るのもどうかと思う魔理沙。だが、あえて上機嫌をまぜつかえずこともないか、とそれ以上の口出しは胸の中に留めておく。

そもそもこの恐竜たちが弾幕ごっこに付き合ってくれるものなのかは激しく疑問だった。

「バチュリー様、新しい入荷分です」

また新しい本と、こまごました化石標本を山と積んだ台車を押し、司書の小悪魔がテーブルにやってくる。動かない大図書館はそれを見、さっそく数冊をいそいそとテーブルの上に広げ始めた。

「一応こちらで選別してありますけれど、分類の確認はお願いします」

「ええ、有難う」

「まったく、下らないものばかりに興味を持つね、うちの知識人は。……咲夜」

レミリアも興味無い風を装いながらも、羽根をばたばたとさせながら、ちゃっかりと図鑑の一冊を確保していた。暴君竜^{Tレックス}と三角竜^{トリケラトプス}の激突を描いた表紙のそれを膝の上に広げると、呼び出しに答えて現れたメイド長におやつと紅茶のお代わりを命じる。

結局。永遠に幼き吸血鬼も、恐竜にご執心なことに変わりはなく、しばらくはここに居座るつもりらしい。

酷く穏やかな、魔法使いと吸血鬼たちの読書会。

しかし、

「……………」

そんな中、魔理沙がふと手を止めたまま、広げた図鑑の一ページをじっと見つめて難しい顔をしているのに、

フランドールは気付く。

「どうしたの、魔理沙？」

「いや、なんでもないぜ」

フランがなんとなく気になってその顔を覗き込むと、魔理沙はすぐにいつもの笑顔に戻す。

「……………？」

だが、フランドールはどこか、その態度に釈然としな
いものを感じていた。



2

枝を固く竦ませて、春を待つ参道の木々が、一月終わりの風に震える。

いつもは長閑な神社の境内も、普段よりも賑々しく沸いていた。風を切つて箒から飛び降りた魔理沙は、縁側に集った人妖神様、有象無象を見てつぶやく。

「なんだ、こっちでもか」

「ああ、魔理沙さんこんにちは。……いやはや今や空前の恐竜ブーム。これはいつぞやのサッカー以来の大流行ですよ？」

手帖片手に応えるのは、天狗の幻想ブン屋、射命丸文。どうやらここでも、一番の注目は恐竜にまつわる話題らしい。この混雑の理由も、文の持ってきた特ダネによるものようだった。

「なに、あんたも来たの？」

「来ちゃ悪いか？」

のんびりとお茶を啜る霊夢の他にも、早苗に諏訪子、

萃香といった面々が新聞の前にあれこれ言い合っている。

「どこもかしこも恐竜だな」

こんなにも天狗の新聞が読まれているなんて、それこそ異変じゃないのかと魔理沙は言いたくなった。

車座の一同の背中越しに、貰うぜ、と盆の上から手つかずの饅頭をつまみあげ、ひょいと口に放り込む魔理沙。

「あー、私のっ!？」

「むぐ、早いもん勝ちだぜ」

抗議に飛び上がる萃香の額を押さえている魔理沙に、文はすかさず早刷りの新聞を押し付けてくる。

「あ、魔理沙さんもこれどうぞ。号外ですよ!」

まだインクも生乾きの紙面を手で魔理沙が苦笑いしていると、騒ぎからは少し離れた位置で頬杖をついた霊夢が小さく吐息を挟む。

「今日はゴシップよりそっちが優先かしら？」

「これだけ有名になると取り上げないわけにはいきませんしねえ。あ、ちゃんと先日の密着スクープも掲載予定ですでご心配なく」

「……その前に口封じしといった方がよさそうなカラスがいるわねえ」

「……あやや」

お茶を啜りながら微妙に物騒なことを言い出す霊夢が

ら、文はさりげなく距離をとった。

そんな様子を尻目に、魔理沙も新聞を広げてみる。

幻想郷でなによりも早いニュースを謳う一面には、永遠亭主催で白亜幻想展なる催し物が決定されたというニュースがでかどかど踊っていた。

「えっと、なにに？」

……『蓬莱山輝夜氏の一存で開催が決定されたこの展示会には、月の頭脳、八意永琳氏の持つ技術によって復元・蘇生された』生きた『恐竜が公開を予定されており、来月の開催を前に今から盛況が予想される見通し……』

「あんのお姫様は……。面倒なことにならなきゃいいんだけど。不老不死の恐竜とか作らせたりしてないでしようね」

あとで釘刺しておいた方がいいかしら、と呟く霊夢。

かと思えば、その隣では、

「うわあ。すごいですよ諏訪子さま、本物ですよっ？ 本物の恐竜!! それも生きて動いてるなんてこれはもう、幻想郷ならではですよね! ……ああ、本当に幻想郷に来てよかったです!

もう絶対に見えないって思ってたのに——ゴジラとかキングギドラとかはいないんでしょうか!？」

「早苗、それ怪獣」

いつもの通り、やや妙な具合にテンションあがりっぱなしの早苗に、諏訪子がどうどう、と突っ込みを入れている。

蛇に蛙にと祀る神様二柱にそれぞれに鱗やら目玉やらの象徴があるせいか、守矢神社の風祝は怪獣にまで御執心らしかった。

「ん〜。すつごく楽しみですつ。早く見に行きたいです
すね諏訪子さまっ」

「……いろいろ大変だな」

「まあねえ」

満面の笑顔で幸せを噛み締めている早苗には聞こえないよう、魔理沙はこっそりと諏訪子に囁いた。すつかり慣れた風に肩をすくめる神様。

「……それにしても、こんなに馬鹿でかい生き物なんて本当にいたのかしらね。龍神様じゃないんでしょう？」

「何を言うんですか霊夢さんっ!? 当たり前です! 外の世界では常識でしたよ?」

「あんたが常識常識言い出すと、とたんに信用なくすんだけど」

「心外です! 最近ちゃんと幻想郷でも化石が見つかるじゃありませんか!」

「だけど石でしょ、あれ。骨だっていうけど端っこしか

見つかってないし。誰かがこっそり埋めたりしてるんじゃないの？」

「だ、誰が捏造ゴットハンドですか!? ですから化石ですってば!! 大体ですね、恐竜ですよ恐竜!? 巫女としてこう、思うところはないんですか!？」

「ないでしょ普通」

かしましい二色の巫女が温度差のままに言い合いを始める。あまり興味のない様子の霊夢に業を煮やしたか、早苗はぐっと拳を握りしめて立ち上がる。

「もう、埒が明きませんっ。霊夢さんっ、説明してあげますからいまから永遠亭さんまで行きましょう! 諏訪子さまもっ!」

「だから早苗はもう少し落ち着きなってるば」

付き合いきれん、と新聞に視線を落とした諏訪子だが、記事の一部に目を止めて眉をひそめる。

「……ん。んん? ちょ、ちよっと待って、なにこれ!？」
『——本誌記者の熱意ある取材によって判明した事実であるが、件の恐竜の再現技術は、木の樹液から生じた琥珀に封じ込められていた、およそ一億年前の蟲の腹部に残った血を用いたもので、欠損した部分の復元には蛙の遺伝子が用いられており……』っ!?! また蛙を実験材料かなんかに使ってるのか!？」

「あああーっ!？」

やおら立ち上がり、新聞をぐしやぐしやと丸めて地面に叩き付ける諏訪子。その横暴に天狗が悲鳴を上げるが、怒り心頭の神様はまったく気にする様子もない。

「これだから宇宙人はっ!?! まさに神をも恐れぬ所業だね! 大体蛙の遺伝子って、ジュラシックパークまんまじゃないかっ!?! これ、絶っつ対恐竜が暴れ出すよ。デブでピザが大好物そんな技術者が裏切ったりするんだよ!?! うん。保証するっ。間違いないくっ!」

「んー、落ち着きなってる、神様?」

ばんばんと縁側で足踏みをして叫びだした諏訪子の剣幕を諫めようと、萃香が酒気混じりの吐息をこぼして言うが、

「これが落ちついてられるかーっ!?! 行くよ早苗っ!」
「はいっ!!」

元気の良い返事と共に、神様一人と風祝は一陣の神風を起こして飛び去ってゆく。たちまち空の向こうに消えたその後ろ姿を見送り、萃香は再度杯を傾けて、呑気に笑う。

「……なんだかんだ言っつてご先祖様だねえ」
飛び去った二人の背中をカメラに収めている文を横目に、魔理沙は空いた縁側に腰を下ろした。

「あっちの巫女は随分世俗的だな。……霊夢はそんなでもないのか？」

「まあねえ。夢中になったところで益になるものじゃないし。お賽銭も信仰も増えないし、お腹も膨れないし」

博麗神社の巫女はやけに現実的な視点をつけ足して、「やっぱりちよつと信じられないからね、この新聞も」

「失敬な。私の記事に間違いなどありませんよ！」

「どの口が言うのかしらね」

頬を膨らませる文に、霊夢は目蓋を引き下げて湯呑を空にする。本人がどう言おうとも、少なくとも天狗の新聞に故意の誇張表現と、敢えて誤解を招くことを目的にした偏見があるのは事実だ。

「一億年か。……ねえ、あんたなら見たことあるんじゃないの？」

と、霊夢が唐突に誰もいない場所を見て声をかけると。まるで図ったかのようなタイミングで、ずるり、と何も無い空中に裂け目が開き、そこから顔を出す境界の賢者がひとり。

スキマ妖怪八雲紫はいつも通りの胡散臭い仕草で肩をすくめ、半分だけ広げた扇で軽く笑みの口元を隠す。

「淑女に軽々しく歳を訊ねるのはどうかと思いますわ」

「二万歳が一万年サバ読んで意味あるのかしら」

半眼の霊夢に、紫はこほんと小さく咳払い。

「んんっ。一万と二千年前からこの幻想郷を愛する心は変わりませんけれど——」

そこまで言って言葉を切り、紫は大妖怪の妖艶な微笑みを消し、やる気なげにひらひらと扇を揺らす。

「一億年も前になるとさすがにね。過去は見に行つたことがないわけじゃないけれど」

「確か、永遠亭の薬屋もそれくらい生きてたわよね」

「ですが、私の取材によるとですわね、およそ千と二百年ほど前にこちらに来る以前、八意氏は元々月に居た筈ですから、やはり見ていたかどうかは確証はないと思いますよ？ なにしろここは彼らの嫌う『穢れた地上』ですわ」

文花帖を広げそんなことを言い出す文。

それに微笑んで、すい、と霊夢の隣に身体を寄せた紫は、扇の先で霊夢の胸を示して、早苗たちの飛び去った方を見上げる。

「で、霊夢。ほつといいのかしら？ あの子たち」

「……そうねえ」

気は進まないけど、と言いつつも霊夢は腰を上げる。

あの様子では恐らく、永遠亭であれこれと揉めていることだろう。

地下の核融合の件、巨大ロボの件と前科は枚挙に暇がないため、霊夢も無視はしかねているらしい。

「なんかあんたの言うとおりに動くのは癪だけど。様子だけは見に行くか……」

「あ、お供しますっ」

手早くネタの気配を感じ取る文が、多少の打算を交えて応じれば、

「んじゃ、私も行こうかねえ」

腹筋で跳ね起きた萃香も瓢箪を担いでそれに続く。最初に焚きつけた紫はといえばひらひらと手を振って見送る気配だ。

「あ、そうだ」

この際賑やかなほうが紙面映えがすると思ったか、文は振り向いて魔理沙に話を振ってきた。

「魔理沙さんも一緒にどうですか？ 一足先に生きてる

恐竜、見られるかもしれませんよ？」

「あー、……遠慮するぜ」

いちどあつけに取られた魔理沙だったが、すぐに帽子を押さえ、ふいと視線をそらす。

「少々、気が進まんしな」

そう口早に言うのと、魔理沙は皆に背中を向けた。そんな彼女に、これまた振り向きもせず霊夢が言う。

「珍しいわね」

「ちよつと用事が出来てな」

「そ。まあいいけど」

「……？」

意味深な二人のやり取りに文が首を傾げる。

が、魔理沙は答えず、目深にかぶった帽子の下に視線を隠したまま、霊夢たちとは正反対の方向へと箒を舞い上がらせていた。



3

締め切ったカーテンの中に籠った空気は、茸の育成に程よい湿り気を帯び、蜂蜜、香草、膏葉に練成中の丹、インクと古書に香辛料と、雑多な品の入り混じった、馥郁たる魔女の香りを漂わせている。

派手に散らかった室内では、ミニ八卦炉が小さく炎を上げて暖を巡らせ、魔理沙はキャミソールにドロワーズだけというだらしない格好で椅子の後ろ脚に体重を預け、羽根ペンを鼻の下に挟んでいた。

「……………」

胸元にひと抱えもある黒革の装丁の魔道書を抱え、ぺらり、またぺらりと難しい顔でページを捲る。

いつだったかの報酬で手に入れた、とっておきの稀観本の一冊。そのレア度に比例するようにびっしりと紙面を埋め尽くす難解な文面は、少しでも気を抜くと理解できないうまま先へと読み進めてしまいそうになる。

著者の趣味か、やたらに複雑な回りくどい言い回しは、

当時の口語表現に通じていないと、一度の通読ではまるで意味を成さないようだ。

かれこれ3時間余り、辛抱強くその解説に取り組んでいた魔理沙だが、とうとう音を上げて天井を振り仰ぐ。

「……………はー、やめだやめ。今日は身が入らん」

煙の出そうな頭をかきむしり、さっぱり頭に入らない読みかけの魔術書を放り投げると、魔理沙はベッドの上に寝転がった。

「……寝るか」

明かりを消して訪れた薄暗い闇の中、ごろん、とうつ伏せになって枕に顔を押し付ける。

わけもなく毛布を引き寄せ、抱きつくように腕を回す。が。時刻はすでに深夜に差し掛かり、疲れも十分にあるというのに、目を閉じてみても一向に眠気がやってこない。

「……………」

しばらくそうして横になっていた魔理沙だが、何度か寝返りをうってから、やおらがばと身を起こした。

「……………」

カーテンを薄く開け、丸い月の浮かぶ窓の外を見上げて、一度は決心したようにベッドから腰を浮かしかけるが――

が、そこまで。

すぐにまた、身体は脱力してぼすん、とベッドに倒れ込む。眉をよじり、口をむぐむぐと嚙ませて、魔理沙は言いたい言葉を飲み込むように息を吐く。

(……あー……)

少女の心の中で、もやもやとわだかまる想いが、行き場をなくして渦を巻いていた。疲れているはずなのに、熱っぽい頭は落ち着かず、軽く腫れぼったい瞼を無視して意識ばかりが冴えてゆく。

「……………うつつ」

言葉にならない隔靴搔痒の感で、魔理沙は四方八方に跳ねた金髪をぐしゃぐしゃと掻き回した。

「……………くそ」

小さな罵倒は、らしからぬ己への叱咤だ。煮え切らない自分と割り切れない気持ちだが、少女の困惑をなお深めていた。

……それからなおも、一時間近くの逡巡の後。

やがて、魔理沙はゆつくりと起き上がり、もそもそと着替えを終えると、姿見の前に立った。

鏡に映るしよぼくれた表情の魔女に、ぱん、と軽く頬を叩いて気合を入れる。

「よし」

ひりひりと痛む頬に、少しは見れるようになったかと頷いて。

帽子とコートを羽織っていつもの白黒の装いを整えた魔理沙は、施錠もそこに箒に飛び乗って夜の散歩へ飛び出していった。



早春の溪流は雪解けの冷たさに音を立て、夜ともなればひやりと冬の残り香を纏わせている。このまま沢沿いに登って行けば山に入る前に残雪も見つかるだろう。

そんな河原の畔で、こんな夜半にも関わらず、熱心に望遠鏡を覗きこむ河童、河城にとりの姿がある。

手元には化学薬品のランタンが灯り、少女はその明りであちこちの螺子を調整しながら、しきりにメモを取っていた。傍目にはきちんと動いているようにも見えるのだが、テックニシア技術者の視点では満足の出来というわけではないらしい。

コートを羽織った魔理沙は、そんなにとりの隣でじつとその様子を観察し続けていた。

「河童って、冬場は山に籠るもんじゃないのか？」

「そういうのも居るにやいるよ。私は生まれも育ちも水の中だけ。んで、私に用事かい、魔理沙？」

「……まあな」

言いはするが、先は続かない。明らかに言いたいことがあるのに、それを口に出せない雰囲気魔理沙。いつもの彼女とはかけ離れたしおらしい様子に、身を起こしたにとりは、宇宙を望むレンズから顔を離す。

「……調子狂うなあ」

具合良くコンロの上のポットが蓋を鳴らしているのを見、にとりはそれを背中から伸ばした多機能アームで掴み下ろした。手際よくドリップメーカーに濾紙を引き、リュックの中から缶に入った珈琲豆を取り出し、手早く挽き入れて熱湯を注ぐ。

程無く、香り良い焦げた匂いが溪流の上に広がった。

「眠れないなら、飲むかい？」

「遠慮はしないぜ」

河童がコーヒーを嗜む、というのは魔理沙も最近まで知らない事だった。にとりに限ったことなのかもしれないが。

差し出されたカップを受け取った魔理沙だが、深く黒く凝った液体をちらりと見下ろして小さく硬直する。

「……ミルクとかないのか？」

「眠気覚ましだからねえ」

事もなげにブラックのままの珈琲に口をつけるにとりを見、魔理沙も恐る恐るカップの縁で湯気を立てる濃い褐色の液体にそっと唇を触れさせる。

直後、魔理沙はちろ、と舌を出して顔をしかめていた。

「……熱っ」

「〃悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純で、まるで恋のように甘い〃」

「前の三つはともかく、最後のは違う気がするな」

「つれないよ盟友？」

言って、にとりは熱そうに焦げ茶の液体をすする。堂に入った飲みっぷりに、魔理沙は苦笑しつつも黙ってにとりに倣い、珈琲に再度口をつけた。

「うえ。やっぱり私は酒のがいいなあ」

「それも一理あるけど、酔っ払ってると出来なくなることはあるからねえ」

くるくるとペンを回し、メモを閉じて耳に挟んで言うにとり。

「んで、そろそろ話す気になってくれたかい、魔理沙」

「……そうだな」

あんまり苦いから、舌が馬鹿になったぜ、と呟き、魔

理沙はポケットに押し込んでいた図鑑の一冊を引っ張り出した。明らかにポケットのサイズに収まりきらないサイズの表紙を見て、にとりは訊ねる。

「いつも思うけどそれ、どうやって仕舞ってるのさ？」

「二重底の無限のバッグ。企業秘密だぜ」

「……泥棒の？」

「霧雨魔法店の、だ」

訂正しつつ、魔理沙は平らな石をテーブル代わりに、カラフルな巨大生物が所狭しと群れる図鑑のページを広げてみせた。

「なあにとり、こいつをどう思う？」

「なんだ。例の恐竜の話か。生き物は専門外だよ？」

「学問的な話だぜ」

「そうかい。魔理沙はこういうのが好きそうに思えたけどね。『恐ろしく巨大な蜥蜴』なんて、いかにもパワー満載そうじゃないか」

「酷いな。それでも私は乙女だぜ？」

ちよんちよん、とエプロンドレスの胸元を指で示しつつ、魔理沙はそっと夜空に視線を放る。

「なんて言うかな、こういうのが流行るのは一向に構わないんだが」

がりがりと、うまく言葉を見つけれないままに魔理

沙は髪をかき上げる。

新しいものの流行、それ自体は魔理沙だって歓迎だ。

むしろ率先して飛びつく側でもある。だが。

「……全員が全員揃って、これを信じてるつてのが、気になりだしたらどうもな」

「何がまずいのさ？」

魔理沙はしばし瞑目し、近くにあった河原の小石を拾い上げる。

「たとえばだ。これが月の石だって言つて、にとりは信じるか？」

突然な切り出しに、しかしにとりは馬鹿にするでも呆れるでもなく、きちんと考えて、首を横に振る。

「……ううん」

「そうか。でも、私には今はそんな風に見えてしょうがないんだ。この、河原に転がってそうな石が、さも当たり前に月の石でございって値札張られて飾られてる。

……いや、実際そうだっていう研究があるのは分かっているつもりだぜ？ 月にはロケットが飛んだし、宇宙人だってちゃんと居る。けどな、それを誰も贋作だって疑ってないのは、やつぱりおかしくないか？」

もう一度カップに口をつけ、珈琲の苦さに顔をしかめて、魔理沙はぼつりと言葉を続けた。

「……何億年も昔のものなんて、誰も見たことがないのにな」

熱いカップの中、魔法使いは揺れる黒褐色の水面に視線を落とす。コンロの音は変わらず、溪流のなかに響いていた。

「……ふうん。魔理沙は、そのへんが気に入らないわけだ？」

「自分の目で見たもののしか信じられないとか、そんな狭量なことが言いたいわけじゃない。天の邪鬼だって自分でも思ってるけどな。」

「……けどな、でも、やっぱり違うんだ。私が見たいのは、私が好きなのは、これじゃない」

胸の中のわだかまりを、言葉にすることで形にするように。魔理沙はゆっくりと息を吐く。

「まだ知らないものを知りたい、見たことのないものを見たいていう、その気持ちの答えは、誰かに教わるものじゃない気がするんだ」

「……………」

魔理沙は、星空に向けて手を伸ばす。

届かない場所へ、辿り着けない場所へ。けれど心惹かれ渴望するその気持ちは、普通の魔法使い霧雨魔理沙には、決して止めることのできないものなのだ。

「あの図鑑も、永琳が作ったっていう怪獣も。たぶん私が見たい『本物』じゃない。」

だって大きさも、色も、習性も、全部想像じゃないか。歯の化石一本だけで全身の骨格作るなんて無茶だぜ。それがどれだけ正しいって言われても。……やっぱり、私は納得できない」

「成る程ね」

にとりは、頷いて珈琲のお代わりをカップに注ぐ。

「……昔、教わったことなんだけどな」

誰から——とは、魔理沙は口にしなかった。

「魔法ってのは、『秘す』力なんだそうだ。言葉にできなくて、形にもできない。はるか昔にあつて、今はその大半が失われた”大いなる秘儀”。それが魔法の根源だ。」

だから、魔法使いは自分の研究を簡単に明らかにしないし、魔術書や呪文は誰にも解らないようにする。誰かに教えよう、伝えようとすればするほど、その魔法の力は弱まるって寸法だ」

「それで魔理沙が図書館から追い出されるわけだ？」

「……まあな。そんなだから、読むのが難しい百年前の魔道書よりも、誰も読めない千年前の古文書の方がより強く、より根源に届く魔法の基になるんだぜ」

『神秘』を扱うがゆえに、それをより良く『教え』よ

うとすることは、皮肉にも魔法から魔法使いを遠ざけてしまう。

だから魔理沙は、自分の心に従って、自分だけの魔法を作る。見様見真似でスペルを蒐集し、模倣を繰り返して、茸を使つて実験をして、落書きと想像と試行錯誤だらけのノート^{グリモワール}を綴る。

先達たる魔女たちから見ればどれもこれも稚拙なものでしかないのかもしれないが、それは同時に誰のものでもない、魔理沙自身の、彼女だけの魔法だ。

まだ見ぬ未知の理知を求め、日々研鑽を積み上げる、ごくごく普通の魔法使い、霧雨魔理沙。

(……そっか。)

一人、にとりは思う。

そんな彼女であるからこそ、地底の騒ぎのときに、人見知りのはずの自分がわざわざ協力相手に選ばうと思つたのかもしれない、と。

「たぶん、私が好きなのは『本物』の恐竜なんだ。

一億年だかの昔に、生きて、動いて、歩いてた——その『本物』が見たいんだろうな。まあ、……そう簡単にや無理だつてわかつちやいるんだが」

自嘲気味にそう呟くと、魔理沙は帽子のつばの下から、そつとにとりの顔を見上げ、

「……あー。何言つてんだか良くわからんな自分でも。でもな、なんとなく、お前なら解つてくれるんじゃないかつて思つたんだ」

「ん。……光栄だね、盟友」

「……ま、まあ、そんなとこだぜ」

ようやく喋りすぎていたことに気付き、魔理沙はコーヒーのカップを抱え込んだまま気恥ずかしそうにふい、と顔をそむける。

そんな盟友の姿を見て、にとりは小さく微笑み、膝の上に手を載せ、頬杖をついた。

「……まあ、どうしても言うならやつぱり、スキマ

の賢者様にでも頼むのが一番じゃないかねえ」

「ありや駄目だ。胡散臭すぎて何見せられても信用する気になれん」

「そうかい」

間に、溪流のせせらぎと珈琲を啜る音だけが響く。

しばしの無言の後、にとりはふうむ、と顎に手を添えて口を開いた。

「可能性の話はわきに置いておくとして、何億年も昔のことを見る方法、ひとつも無いわけでもないよ？」

「お？」

「……ちよつと長い話になるけど。まず、音には速さが

ある。知ってるかい？」

「ああ。たまにぶつかるからな」

音の壁、というものがある。物体が音の速さを超えようとするとき、その行く手に立ち塞がる壁のことだ。

音の速さは魔理沙自身も筈の最高速度を計測する等加速度実験で身をもって知っている部分だ。天狗なんかは楽勝で突破することもあるらしいが、さすがにそれは眉唾だろうと考えている。

「おんなじように、光にも速さがあるんだ。音なんかよりも全然、桁違いに速いけど」

にとりは蒼い灯をともしコンロの炎を示し、その指先を自分の目へと動かした。

「私たちの目は、ふつう物が発したり反射したりする光を見て物の形とかどういう色をしているかを認識するんだ。だから、光がなくなればそれは見えなくなる」

「ルーミアとか、夜雀のあれか？」

「そだね。闇妖が操る闇は物が反射したり発する光を閉じ込めちゃうから、取り囲まれたやつは周りの物が見えなくなる。夜雀は逆に、歌声で目のほうの機能をおかしくして、周りの光を認識できなくさせてるってことさ。だから——」

と、にとりは袖元のワッペンをくいと引っ張った。

とたん、かすかな機械の起動音と、わずかに物を焦がしたような匂いが漂い、六角形のタイル状に現れた光学迷彩が、彼女の周囲を包みこんだ。

ほどなく、彼女の姿は溪流の風景の中に溶け込んで見えなくなった。しかし、姿形は消え失せても、変わらずそこから河童の声は続く。

「こうやって光の進み方を捻じ曲げてやれば、たとえ目の前にいても見えなくなるってことだね。この場合、私が居ることで遮られる背後の光を、魔理沙の目に入るようにしてやってることになるけど」

「なるほどな。あれだろ、忍者がたまにやる隠れ身の術」
「……一緒にされるとなんか微妙な気分だけど、言いたいことはわかる」

ぶん、と光学迷彩を解除し、再び姿を見せるにとり。

「で、それがどう関係するんだ？」

「ひよつとすると魔理沙にはもうわかっていることかもだけど。さっきも言ったとおり、光にだつて速さがあるんだ。もちろんんよつぽど離れてないと分からないことだけどさ。」

たとえば月の光は、地上に届くまで1秒ちよいかかる。私たちの目に見えてるのは一秒前の月ってこと。これ、見てくれるかい？」

にとりは傍らの望遠鏡を操作し空の一点に焦点を合わせ、場所を譲った。促されるままに、魔理沙は望遠鏡のレンズを覗く。

レンズの向こう、数十倍に拡大された無辺の宇宙に、鮮やかな星空が映る。

「知ってるぜ。天狼星は8・6年前の光なんだよな」

おおぬぎ大狗座の一角のマイナス1.5等星を見、言う魔理沙。

星の配置に見立てられ、天に祭り上げられた数多くの神話。それらが織りなす物語は、魔法にとつても大事な要素だ。

けれどそれらの星々は、ここから見える形のように寄り集まっているわけではない。北斗の柄杓もオリオンの三つ子星も、紅い目玉の蠍の缺も。地上から見ればすぐ隣り合う星であつたとしても、本当ははるか離れた場所にあるのだ。

「そういうこと。いまこの瞬間にシリウスが無くなつたとしても、それが私たちに見えるのは8年7ヵ月ちよい後つてことだよ」

にとりは地面に枝の先で星との距離を書き込み、その先に矢印を引き伸ばしてゆく。

地上を示す小さな丸から、ずっとずっと遠くへ延びてゆく矢印の先に、小さな印を刻み、枝を突き立てた。

「恐竜がいたのが大体一億年から数千万年前だとすれば、その時に地上から出発した光は、いまも遠い遠い星々の果て、宇宙の彼方を飛んではるはずなんだ。

だから、何億年前の地上の光景だって、確かに宇宙のどこかで見ることはできるはずさ。それを追っかけて先回りすれば、そのずっとずっと昔の光を——何億年前に確かにあつた光景を見ることができるともしれない」

「なるほどな」

聞いているだけでも与太話とわかる、絵空事。しかしそんな途方もないにとりの話を、魔理沙は笑うことなく真剣に聞いていた。

「けど、その先回りする方法つてのがどうにもならないんだよね。……詳しい説明は省くけど、光より速いものは、普通ないからさ」

速度が光へと近付くにつれ、移動する物体の重さは無限大に近付く。つまり、光の速さで移動するものは無限大の重さを持ち、動くことができなくなってしまう。それは矛盾だ。

「光の先回りをするには、結局胡散臭いことの手を借りなきゃいけないってことだな」

「だねえ」

お手上げだよと肩をすくめて見せるにとり。魔理沙と

ふたり顔を見合わせ、そろって溜め息をつく。

「やれやれだ。結局元通りだぜ」

幾分和らいだ雰囲気の中、魔理沙は河原の上のごろんと仰向けになる。

そう言えばもうだいぶ遅いけれど、もしかしてこのまま泊っていくつもりなのだろうか、と思い至り、にとりはわけもなく熱くなった頬をこしこしと擦った。

「も、もう一杯、飲むかい？」

「……ん。眠れなくなるからやめとくぜ」

「そうかい」

そうして、夜は更けてゆく。

魔理沙は、結局それから夜明けまで、にとりのねぐらに居座って、ずっと星空を眺めていた。



4

くしゅ、と可愛らしくしゃみの一つ。いくら赤く
った鼻先を擦り、普通の魔法使いは顔をしかめる。

夜更かしをしたせいで引いてしまった鼻風邪は、まだ
治らずにいた。風を切る簾の上、すん、と鼻を鳴らし、
ケープの前をかき寄せて冷たい風を防ぐ。

「……結局、一週間探し回って収穫なしか」

傾いた夕焼けの中、帰り道に寄ったヤツメウナギの焼
き串を囓りつつ、魔理沙はぼやく。

光の速さに挑む、といういつそ無謀な挑戦は、全くと
言っていいほど進展していなかった。

魔法の研究でも八方塞がりなんてことはよくあるもの
だが、そもそも光の速度を超えるという目的はあっても、
そのための手段が一切分らない状況では何の手がかり
もあつたものでもない。

紅魔館の大図書館にも連日を顔を出しているが、もと
もと魔術書、オカルトに偏ったあの書庫の蔵書では、こ

の類の内容についてはまるきり明るくないようだった。
簾の加速度を上げる方法はいくつか発見したもの、そ
れ以上の進展はない。

「……パチュリーにまで精が出るわねなんて皮肉言われ
るとは思わなかったぜ」

不慣れた分野で数少ない資料を見つけ出してみても、
その大半は意味のわからない数式と記号の羅列。いつそ
理解させる気がないのかというほどに、解読しようとし
ても、式ならぬ魔法使いの魔理沙には呪文以上にわけの
わからないものだった。

読んでいるだけで目がちかちか、頭がくらくらと限界
を訴えるほどの内容と一週間、ぶっ続けで格闘して。

分かったことと言えば、光の速さというものがどれだ
け絶対的なものであるかということくらい。アイシシユタイ

という著者などは、信仰と言えくらいに光の速度を永
遠不滅恒久のものと祀り上げていたりもした。

（……仮にだ。ややこしいことは抜きにして、もし光の
速度で動けたとしても、そもそもにとりの言うような宇
宙の果てまで飛んでいくなんてのも現実的じゃないし、
第一どうやれば何億光年も離れた星の表面なんかを観察
できる？）

月までは光の速度で1秒かかると言うが、その月の表

面の山谷を見るのだって肉眼では不可能だ。魔理沙も視力にはそれなりに自信がある方だが、他の恒星なんかは、望遠鏡でもなければ輪郭さえ見えない。外の世界には星辰の果てを覗き見る巨大な天文台もあるそうだが――

「だいたい、千里眼があったところで光の先回りをしなきゃ意味がないしな」

プロジェクトの住吉計画の仕様ロケットですら月まで辿り着くのに1週間以上の時間を必要とした。光を追いかけるのにはその何倍の速度が必要なのか。

（光の2倍の速度が出せたとしたって、単純計算で一億年前の光に追いつくまでに、また一億年かかるわけだしな。……婆さんになる程度じゃ済まないぜ）

物思いにふけりながら、魔理沙は試みに箒のスロットルを開け、速度を上げてみる。

今は本格的な速度計測使用に調整していないので、嬾ではあるが精々が天狗の3分の1。それでも風を感じる頬がしびれる程度に痛む。

ここ数年の研究で、魔理沙の箒の最高速度は年々記録更新を続けている。けれどそれでも、形振り構わずただそれだけに特化して、ぎりぎり音の速さの尻尾にも手が届くかどうか。

溜息とともに、魔理沙はすとむ、と地面に降りた。こ

わばった背中をほぐすように伸びを一つ。

結局、誰も当てにはならない。

「仕方ない、また香霖とこでも行つて探してみるか……」

確か、月ロケットの時にも、一番役に立ったのは外の世界の文献だった。恐竜ブーム以来、香霖堂の品揃えも偏っているのだが、背に腹はかえられない。つぶやいた魔理沙がふと足を踏み出した瞬間。

「ぶっ!!」

べちん、と音がして、視界に火花が散る。

何か硬いものに顔をしたかによつて、その衝撃に魔理沙は顔を押さえてうずくまった。

「おおおお……!!」

痛む鼻先をさすって、涙を滲ませながら顔を上げれば、目の前にはさつきまでなかったはずの木の幹が屹立していた。

「よしっ、大成功!! 逃げるわよルナ、スターっ」

魔理沙が赤くなつた額を押さえていると、近くの茂みをがさがさと揺らし、見覚えのある小さな姿がちよこんと顔を出す。

姦しい声と共に、ぱーつと走り出す悪戯三妖精たちの声に、魔理沙はすべてを理解した。

「あんにやろお……」

光の屈折を利用して、眼の前の木の幹を見えなくさせていたのだ。古典的にして初歩の初歩、里の村人でもまず引つかからないような他愛もないイタズラだ。

よりによってこんな悪戯に引つかかるといのは、いくら考え事に熱中していたにしてもお粗末に過ぎる。

魔理沙は怒りと共に箒をつかみ、逃げる三妖精の後を追おうとするが――

そのとき、まるで稲妻のように、魔理沙の脳裏を衝撃が走った。

（光の、屈折？）

その原理は魔理沙も知っている。ガラスや蜃気楼でも見られる現象で、プリズムや虹として魔法にも応用されている。つまり、屈折率の違うものを光が通り抜けるときに、その差によって光が曲がるということ――

「っ、そうか!？」

天啓のように閃いたその発想は、魔理沙の鼓動を跳ね上げる。

改めて箒にまたがった魔理沙は、服が風の抵抗で暴れるのにも拘らず、全速力で森を突き抜けた。

みるみるうちに、先を行く悪戯三妖精たちの小さな背中が見えてくる。

「ひあ、もう来たっ!？」

後ろを振り向いて悲鳴を上げるのは、やや遅れているルナチャイルド。こういうとき、きちんと隠れていればいいものをそうしないのが、いかにも目の前のことにしか頭が回らない妖精らしかった。

「ちよつとサニー、早く逃げなきゃっ」

「わわっ！ 引つ張らないでっ!？」 ルナこそ邪魔しないでよ!!」

「お、囃作戦よっ!」

いつの間にか仲間割れまで始めている。混乱に乗じてスターサファイアがちゃっかり姿を消しており、残っているのは二人だけだ。

「お前達っ!!」

三妖精たちがもたついている間に、魔理沙はさらに箒の出力を上げ、一気に追いついた。

「っ!？」

「きゃーっ!？」

観念したかのようにサニーミルクたちは頭を抱えてしやがみこむ。が。

「感謝するぜ!!」

魔理沙は満面の笑顔で、それだけ言い残し、一陣の突風とともに彼女達を追いついてゆく。

箒が巻き上げた砂ぼこりにまみれて、置いてきぼりに

されたサニーミルクとルナチャイルドは、けほ、と咳き込みながら、きょとんと魔理沙の背中を見送っていた。

「……打ち所、悪かったのかしら？」

「さあ」

わけもわからず礼だけ言われ、残された妖精たちは、呆気にとられて、なんだったんだろう、と顔を見合わせるばかりだった。



「にとり、いるか!？」

山へと続く溪流の河原に、爆音が響く。まるで砲弾のように河面を吹き飛ばし、彗星さながらに着地した魔理沙は、自分の巻き起こした水蒸気の煙の中、握り締めた古い紙束を振って叫ぶ。

「分かったんだ!! 光より速く動けないんなら、光のほうを遅くしてやればいいんだ!!」

叫ぶ魔理沙の先で、霧がゆつくりと晴れ——
硬直しているにとりの姿が覗く。

ちょうど水浴びでもしているところだったのだろう、

にとりは一糸纏わぬ姿でちょうど身体を岸边に上げたその状態、生まれたままの姿で——帽子だけ被り、濡れた白い肌を見せている。

「え……?」

「にとり、ほら、これだつ」

あまりの唐突な事態についていけず硬直しているにとりなどお構いなしに、魔理沙はその肩を掴む。

跳ね散らかす水でブーツが水浸しになるが、大発見に夢中の魔理沙はまったく気にも留めないまだ。

「そうだけ。良く考えたらお前んとこの光学迷彩も同じだよな。光の速度とか角度を捻じ曲げてるんだから。ちくしょー、なんでもっと早く思いつかなかったんだろうなこんな単純なことつ」

「あ、あう、あ、ま、まり」

「ちゃんと裏づけもあるんだぜ? これだ、ここにも書いてある。えらくボロい文献だがな、多分これならいけるぜ。スロウグラスって言うらしいんだが——」

「あ、いや、あの」

顔を真っ赤に、少女の思考はオーバーフロー。舌も回らず、逃れようにも魔理沙に詰め寄せられ、さらに肩まで掴まれていて離れられもしない。

その一方で、大発見に夢中の魔理沙はにとりの様子に

気付いていないのだ。

「つて聞いているか、にとり——」

魔理沙の視線が、両腕をはつきりつかまれて無防備な肌へと落ち——

「ひゅい!？」

ついに臨界点を突破した河童の頭からぼむと蒸気が噴き出す。

同時。

「ッ、『お化けキューカンバー』ッッ!!」

至近距離で炸裂したスペルカード宣言と共に、したたかにほったたけを引っぱたかれ、真横に吹き飛ばされた魔理沙は、紙束を撒き散らしながら、溪流の上を水切りの小石のように4回跳ねた後、はるか上流の滝つぼに沈んでいった。



「いや、だから悪かったって」

「ううー……」

所移してにとりのねぐら。

濡れネズミの身体をタオルで隠し、魔理沙は部屋の端に座り込む。吊るした服からはまだ雫が滴り、その下でミニ八卦炉が炎を上げている。

部屋の反対側では、これまたタオル姿の真つ赤な顔のにとりが、物陰から頬を膨らませたままちらちらと様子を窺っていた。

魔理沙のほったたけには大きな赤い手形の痕。思い切りにとりのスペルカードに被弾した痕跡である。

「……まあ、うん。私も短慮だったとは思うぜ？　しかし、流石に女同士でここまでされる筋合いもないと思うんだがな」

「うー。盟友だと思ってた相手にあんなことされたんだからっ!!　確かにあっちこっちで色々噂されてるけど、魔理沙はあんなことしないって信じてたのに……心の傷はおっきいんだからね!？」

ばんばんと近くの壁を手で叩き、力説するにとり。

しかし、魔理沙の頭の中は他のことで一杯のようだった。すまん、と軽く手をあげると、まだ湿っている紙束を広げ、にとりを呼ぶ。

「それより見てくれ。これだ。光に追いつく方法を見つけたんだ。……たぶん計算は合っていると思うんだが、私だけじゃ解らないところがある。にとりの知恵が借りた

いんだ」

「……はあっ」

他に言うことはないのか——という言葉を読み込んで、にとりは肩を落とした。

「しょうがないな、魔理沙は」

熱意に溢れた魔理沙の視線に負けて、にとりはタオルを押さえたまま慎重に物陰を出た。

それなりに気にして近づく間も、魔理沙は床に広げた古い紙束に夢中になっている。にとりは再度、深く深く溜息をついた。

「……どれだい？」

「ほら、これだ。このスロウグラスつてのが、光が通過するのに何百年も時間のかかる鉱物らしい」

「見せて。……ふむふむ」

時間を停めた硝子。その文献にはそう名前があった。その結晶構造の中に螺旋状の回路を持ち、一方から入った光を捉え、長い長い迷路の中に閉じ込める天然鉱石なのだという。

そうして、光が通り抜けるのには長い時間を要する。文献によれば、数センチの厚さで十年以上、昔の光景を見ることが可能とされていた。スロウグラスは非常に希少で高価なもので、現在の時刻との時差がなければなら

ほどその価値は上がる——とされているが、これはこの際関係ないだろう。むしろ重要なのは、

「屈折率が違うってことは、光の進む速さが違うって事だ。サファイアだかの中では、光の速度は半分近くになるんだろ？」

「……もっと遅い物質を探せばいいってことか。冴えてるね魔理沙。これなら確かに、見えるかもしれない」

理論上はね、と心の中で付け加え、にとりは応じる。

「光を閉じ込めた鉱物——さしずめ星の琥珀だね」

「星琥珀か。びったりだぜ。後はこれを探せばいい。なあにとり、手伝ってくれるよな？」

まるで、断られることなんて予想もしていないといった雰囲気で、手を掴んで来る魔理沙に、

にとりは、なんとも言えない実に微妙な気分で応じていたのだった。



5

「ここだな、間違いない」

空の一点で静止して、くりんとロッドの曲がりを確認し、ナズーリンはそう結論づける。

眼下には深い森が広がり、その下に溪谷を覆い隠していた。妖怪の山の反対側、人も妖怪もほとんど立ち入ることのない樹海は幻想郷における未開の地でもある。

「この子とこの子が現物を見てきたようだね。……推定30m幅の星琥珀^{スロウグラス}の結晶。そちらの指定どおりのものはずだよ」

あるかどうかも分からない、未知の鉱物。だがその探索は思いのほか順調に進んだ。命蓮寺の寅丸星とナズーリン。財宝が集まる程度の能力と、探し物を探し当てる程度の能力。ふたつのコンボは、あっさりとは幻想郷で一番大きな星琥珀の鉱脈を発見していたのだ。

ダウザーの小さな大將は、派遣していた子ネズミ達から偵察の結果を確認し、順にその頭を撫でては彼らをバ

スケツトの中に迎え入れてゆく。

「ご主人様にも確認はしてあるが、ざっと地下100mといったところかな。この子達は這入りこめたようだけれど、君たちの体格では無理だろうね。この付近は風穴も多い。天然の地下迷宮だ。迂闊に潜ると生き埋めになるよ?」

「洞窟探検か。調べるとなると準備が要るな」

「そうだねえ」

帽子の下に手をかざし、多機能ゴーグルを掛けて眼下を覗き込むにとり。ゴーグルに接続された装置で樹下の地形を確認し、計算尺を弾いてゆく。

「地盤も柔らかさうだし水気も多い。まだ知らない妖怪が住んでる可能性もあるね。飛びながら調べるのは難しいかもしれないよ、魔理沙」

「モンスター・サブライズドユーだな。こりや十フィート棒でも用意するか? 迂闊に飛び込んで岩の中じゃつまらんしな」

「まさか、君たち二人でやるつもりかい?」

「優秀な相棒がいるからな。6人も隊列^{バレイ}は要らないぜ」「ひゅい!?」

ナズーリンの皮肉にも、魔理沙はぱん、とにとりの肩を叩いて笑う。

目を丸くしている相棒にはまったく目もくれず、興味津々で地下の様子を覗き見ている魔理沙に、ナズーリンはご苦労なことだ、と呟いた。

「ありがとな。ほれ、こいつが約束の報酬だぜ」

魔理沙から渡されたものを見、ナズーリンはまた渋い顔をする。

「……つくづく安い報酬でこき使われたものだよ。チーズなんかは好まないと言っているだろうに」

そう言いながらも、ナズーリンは千切ったチーズのかけらをバスケットに投げ入れ、自分もまんざらでもなさそうに残るチーズの塊にかぶりついていた。

「むぐ。……ともあれ依頼は完了だ。探査屋の出番はここまで、地図屋も斥候も、野伏も私の本業ではないからね。」

……言っておくが私は頼まれた条件に合致したものを探したまだからね、掘り出した後で話が違うと言われても困るよ？」

「ああ、だったらまた頼むだけだからな」

「……やれやれ、厄介な相手に絡まれたものだ。魔法使いというのはもう少し知性派だと思っていたがね。狂王の護符でも見つけ出す気かい？」

「魔法使い、穴があつたら入りたい、だぜ」

「……妖精は信用するな、竜には手を出すな。か。ご主人様が気乗りしなかった理由が分かるね」

早速、明日からの計画をあれこれと相談し始める二人を尻目に、ナズーリンは肩をすくめ、ちらりと眼下の深い樹海を見下ろしてから、その場を後にした。



「見えてるか、にとり？」

『ばっちり。感度良好だよ』

水滴と泥が滴る風穴の一つを、白黒の影がゆつくりと滑り下りてゆく。傍らには地底の怨霊騒動の時に使った通信珠が浮かび、地上でバックアップに回るとりとリアルタイムで交信を続けていた。

『どうだい、入れそうかい？』

「ああ、なんとか行けそうだな」

水滴除けのコートを羽織り、防塵マスク、防水ブーツに二重の手袋。中身をいっぱい詰めたリュックを背負い、発光量を改良したヒカリゴケのランタンを下げた探索用の重装備で、魔理沙はゆつくりと縦穴を下降し

てゆく。

風穴の中は箒で飛ぶには狭すぎて不自由が多いため、移動は身体を支える魔法のロープとにとりが設置したウインチを併用したラペリングだ。

ロープを操作しながら、壁を蹴って降下を続けた魔理沙は、ほどなくブーツの靴底で孔の底に硬い感触をとらえた。

「……底についたぜ。この下か？」

『そのはずだよ』

「行き止まりだぜ？」

『ありや？ ……埋まっちゃったのかな。孔壁が崩れたのかも。この前地震があったし』

「おいおい。ぞつとしないな。生き埋めは御免だぜ？」

呟いて、魔理沙はランタンをかざし、縦穴の突き当たりを照らす。

『……いったん引き上げようか？』

「いや。待て、にとり。これなら……」

白いランタンの明かりに照らされた穴の底には、土に埋もれたかすかな亀裂が見て取れた。魔理沙はロープで慎重に身体を固定すると、岩盤にブーツの靴底を押し当て、力を込める。

「よ、この、つ、ていつ!!」

思い切りよく地面を蹴ると、ブーツの爪先が土の中にめり込む。それを何度か繰り返すと、ふいに足元が軽くなり、次の瞬間には苔の積もった底が抜け落ちて、穴の底にはばかりと大きな口が開いた。

永い間閉ざされていた空間から、箒った苔の匂いが溢れてくる。

「よし、空いたぜ」

『どうだい、魔理沙!』

「ん。……空気はあるみたいだな」

千切った燐寸^{マッチ}を放りこみ、その火が消えないのを確認してから、魔理沙は再度下降を始める。

縦穴を抜けると、一気に周囲の空気が重くなった。

大きな空洞に出たのだ。粘つくような深い闇が、魔理沙を取り囲むように押し寄せてくる。

「……おお？」

空洞はかなり大きいらしく、ぼつりと呟いた声が、わんわんと反響する。良く耳を澄ませば小さな水の流れも聞こえてきた。

『魔理沙?』

「……大丈夫だ。見つけたぜ」

魔理沙はロープを手繰って、地下推定100mの地下空洞の底へと降りる。神社が丸ごと入ってしまいそうに

大きな空間には、ブーツの底が踝までめり込むほどの分厚い泥と苔の絨毯が一面に広がっていた。

重苦しいほどの闇の圧力が、ランタンのちっけな明かりなど押し潰さんばかりにあたり一帯を埋め尽くしている。

「……おー。まさに秘境だな。こりやカメラの後に入ってわけにやいかなそうだ」

一步を踏むたび、目を持たない小さな虫が、灯りから逃れるように一斉に四方に散ってゆく。

風穴はかなり広い空間になっているらしく、頬にはゆつくりと風の流れも感じる事ができた。遠くにかすかに聞こえる滝の音は、さらに地下の地底湖にでもつながっているのだろうか。

湿度は高く、しかし気温はかなり低い。泥と雪のついたゴーグルを拭い、手袋の指に息を吹きかけ、魔理沙は額に汗が湿るのを感じる。

『これが？』

「星琥珀、だな。探查屋^{ダウザー}の言葉を信じれば、だが」

『……組成は、間違っていないと思う。ここから見た限りだけ』

通信珠を通じて、にとりの緊張が伝わってくる。

魔理沙が掲げたランタンの明かりに照らされ、ひんや

りとした洞窟の奥に突き立つ、見上げるほど巨大な鉱物の柱が明らかになる。

よく見ればうつすらと光を放つ深い黒色の柱は、見えるだけでも高さにして楽に十数メートル、幅も奥行きもそれに近い。見えている分だけで下手をすれば家一軒のサイズほどもあった。

「……よ、つと」

不安定な足元を慎重に進み、魔理沙は鉱柱の傍に歩み寄ると、腰の十フィート棒を組み立てて黒々とわだかまるその表面を叩く。きいん、と澄んだ硬い音が洞窟の中に反響し、思わず魔理沙は耳を塞いだ。

「ん……いやはや、ここまで完璧に人跡未踏だとは思わなかったぜ」

『……少なくともここ数百年くらいは、誰も出入りしてなさそうだね』

事によれば未知の妖怪との遭遇、戦闘もあり得ることを想定しての重装備だったが、この分ではその心配は無用のようだった。

無人の気配と共に、ただただ無機質な闇は、立ち入る不埒者を除あらば押し潰さんとするかのように濃密さを増していた。

「しかし、覚悟はしてたがこれじゃな……削らんと見え

ないか？」

ランタンに照らされる埃まみれの黒い鉾石柱の表面は、無残なほどに歪な凹凸にへこみ、ヒビだらけになっていた。柱の表面にたつぷり積もった泥を拭い、魔理沙はそこを覗きこむ。

スロウグラスの中では、光が何百倍、何千倍の遅さとなるといふ。それは逆に、スロウグラスの中を透過する光は、グラスの表面のほんのわずかな凹凸の差で何年も位相がずれてしまうことを意味していた。

厚さが均一でなければ、表面に浮かぶ像は意味を成さず、乱反射した光がぼんやりと燐光を放つだけだ。魔理沙たちの望む何億年前の光景など、映るわけもない。

『どうなんだろうね。この中に光が閉じ込められてるとしたら、下手に形を減らすのは避けたほうがいいかもしれないよ、魔理沙。』

資料読んでる限り、一回取り込まれた光は単純にグラスの中を直進してるわけじゃないみたいだし、この中のどこにそのときの光が閉じ込められてるのか分からない。応急処置だとしても、表面を樹脂で埋めて平面化したほうがいいんじゃないかな』

あくまで慎重に意見を述べるにとりだが、魔理沙は会心の笑みを浮かべる。

「……いや、これなら大丈夫だ」

拭った泥の下から、ぼんやりと朱い輝きが覗き始めるのを見て、魔理沙はぱちん、とランタンの窓を閉じた。ヒカリゴケの灯りがふっと消えた闇の中に、じわじわと薄赤い光が満ちてゆく。

『そうか……』

にとりも考え違いに気付く。これは黒色の鉾石柱ではなかったのだ。スロウグラスはもともと、膨大な時差はあっても光を透過させる物質であり、無色透明だ。この鉾柱は、はじめからずっと夜の闇の光景を映し出していたのだ。

「時差にして8時間。……感度良好だ」

魔理沙はショールの下から懐中時計を引きずり出し、蓋を広げて確認する。幅数十メートルの鉾柱が、ぼんやりと輝きを放ちながら屹立するさまは、およそ地上にあるどんなものよりも、神秘的にすら映る。

そう。光も射さないはずの地下の底に、びつしりと苔が生えていた理由が、これだ。

長い長い時を隔て、琥珀の中から溢れる光——まるで昼間のように、陽の差し込まない地下に、鮮やかな光が満ちてゆく。一秒ごとに変化する色合いは、薄明から朱に変わり、鉾柱全体に広がってゆく。

やがて、壁一面に広大で肥沃な大地が姿を現す。

蒸し暑さを感じさせる色濃い空。薄赤い朝焼けの下には、原生種を思わせるシダや苔が茂り、太い蔦と木々が枝を絡めあつたジャングルのような樹々は、時折うねるように蠢いている。

見る者の魂を奪つてゆきそうな、原色の光景を映し出した星琥珀の表面を叩き、魔理沙は言う。

「これが、一億年前の日の出だぜ」

ゴーグルを外した魔理沙は、手の届きそうな場所に広がる、鮮やかな一億年前の風景を前に、ぐつとこぶしを握りしめた。

「よつし。じゃあ早速準備開始だ」

『準備？』

にとりの声にああ、と頷いて、魔理沙は背負っていたバックパックの中身を広げ始める。出てくるのは簡易天幕、毛布、おやつ、水筒、ランタン、暇つぶし用の魔道書が数冊。

続々と取り出されるそれらを見て、にとりは思わず声を上げる。音量調整が間に合わず、通信珠がハウリングを起こした。

『って魔理沙、このままここで張り込むつもり!?』

「そりやそうだ。見逃すわけにいかないぜ。いつ恐竜が

見えるか分からないしな。折角ここまで来たんだ。戻る方が手間だろ?」

『その大荷物つてそのためだったのかい!? 武装とかはどうしたのさ?』

「半分は持つてきてるぜ。もう半分は置いてきた」

さらりと返され、にとりは絶句してしまふ。

洞窟の安全もまだ確認できていないし、観測するにも他に方法はあるというのに、魔理沙はあろうことか一番原始的な方法を選ぶつもりらしい。

『や、でも魔理沙、私もほかに仕事とかあるし、ずっとここに居続けつてわけにも——』

「ん、そうか? なら無理しなくていいぜ? あとは黙つて待っただけからな!」

罪悪感を胸に切り出したにとりにあっさりとそう答え、魔理沙は鼻歌交じりに準備を始めるのだった。



6

◆二月九日

観察二日目。変化なし。昨日に続き新聞屋と見物人あり。三時間ほどで帰る。

◆二月十一日

観察四日目。変化なし。自宅まで往復。不用心だとアリスに釘を刺される。

◆二月十四日

変化なし。琥珀の精密計測を行う。キャンプ近くに亀裂を発見。念のため足場の補強を行う。右脚に軽い打撲。手持ちの薬で応急処置を行う。

◆二月十七日

変化なし。自宅まで三往復。食料・資材を運びこむ。整理で時間が潰れそうだ。

◆二月十九日

変化なし。荷物の整理が完了。明け方に微震。大事には至らず。

◆二月二十二日

変化なし。通りすがりの妖怪をからかって遊ぶ。

◆二月二十三日

自宅まで往復。途中で雨に降られる。持ち出した本数冊に被害。変化なし。明け方に発熱。

◆二月二十五日

変化なし。熱がようやく引く。

◆二月二十七日

変化なし。嗜好品の類が乏しい。

◆三月一日

変化なし。にとりが来る。軽い片頭痛。夜半に回復。

◆三月四日

変化なし。



それから一月が過ぎた。

補強をほどこされ、換気を整えられた地下空洞の一角、天幕の傍にはかまどに寝袋、洗濯物まで干され、すっかりワイルドな生活感にあふれていた。

傍らではミニ八卦炉が小さな炎をともして灯りと暖を供給している。

「まりさー？」

空洞の入り口でもある換気口からひょこんと顔を出したにとりに、魔理沙は寝そべったまま顔を上げ、鼻上の眼鏡を押し上げる。

「お、にとり。一週間ぶりだな」

「また風邪ひくよ、そんな恰好で」

リュックから延びる多機能アームに捕まって空洞の底に降りたにとりは、魔理沙の傍に腰を下ろす。

何に熱中していたのだろう、と思ったにとりが覗いてみれば、枕元に広げられたノートには几帳面にびっしりと観察記録が残されていた。

毛布にくるまり、簡易テントの下でじつと星琥珀の前に陣取っている魔理沙を気遣うように、にとりは荷物を広げる。

「まだ起きてたのかい？ もう夜だよ」

「さんきゅな。穴倉生活だと時間が分からなくて困る」
んーつ、と伸びを一つ。こきこきと肩を鳴らし、魔理沙は少し赤い瞳の目頭を押さえる。いくらか日焼けも抜け、肌色も白くなっているようにも見える魔理沙に、にとりは心配そうに告げる。

「もう一ヶ月もでしょ？ みんなも心配してたよ」

「たまには一応帰ってるぜ。三日に1回ぐらいだけだな」
すっかり別宅と化した様子の洞窟に寝そべる魔理沙。風の入りかたなども工夫され、居心地はさほど悪くはないのだろう。

だとしても、少女の表情に拭いきれない疲労が滲み出ているのは明らかで、にとりの胸中は穏やかではない。

「それくらいで騒ぐやつはいないぜ。現に、だれも見にこないからな」

「……そうだねえ」

にとりは曖昧な表情で頷いた。

森の白黒魔法使いがまた妙なことを始めたと、一度は噂になったものの、それも最初だけ。色々と冷やかに

着ていた連中の足もすっかり遠のき、いまでは土蜘蛛^{ヤモリ}が地下トンネルの巡回ついでに顔を出すか、時々新聞屋が様子を見ていく程度だ。

それどころか、いつのまにか幻想郷からは「恐竜」というものの目新しさも忘れ去られつつあった。

『すべてを受け入れる』幻想郷においては、新参者が異邦人として扱われるのもほんのわずかの間のことでしかない。その参入の騒動や、価値観の違いからもたらされた多くの異変は幻想郷の歴史に取り込まれ、やがてはそれがあつたことすら、多くの者にとっては曖昧になる。

「……薄情なもんだな、実際」

魔理沙の独白は、自分に対してのものか、それとも恐竜に対してのものだろうか。いたたまれなくなつて、にとりは思わず口にしていた。

「ん。……一緒にどうだって、みんな誘ったんだけどねえ。霊夢にまで面倒だって断られちゃつてさ」

「あー。あいつは来ないな絶対に」

あつさりそう言つて、魔理沙は苦笑する。

神社で声を掛けたときにも『やめとくわ』のひとつで、ほとんど反応らしい反応もなかった霊夢の態度に、いくらなんでも友人に対して素っ気無さ過ぎるだろうとにとりには内心憤つていたのだが――何のことはない、一

番古い付き合いらしい白黒魔法使いは、一番巫女のことを良く知つていようだった。

「これは私のわがままで、私が勝手に意地張つてることだからな。霊夢は来ないさ」

それは。

むしろ、彼女のことを信頼しているような口ぶりです。にとりは少し、そのことが妬ましかった。

取り繕うように俯いてにとりは荷物を探り、そこからコーヒーのドリップセットを取り出す。

「……。魔理沙、飲むかい？」

「さんきゅな。もちろん貰うぜ。そろそろ悪魔のように黒くて、地獄のように熱くて、天使のように純なところが欲しかったからな」

コンロに火が灯り、程なくドリップ仕立ての珈琲ができあがる。

金属のカップをかつん、とぶつけ、魔理沙にとりには芳醇な香りと苦味を飲み込んでゆく。

「……ん。うまいぜ」

「そうかな。……良かった」

そうして、二人の会話が途切れると、広大な地下空洞には恐ろしいほどの静寂が満ちた。

一億年前の蒼空を移す星琥珀も、音を伝えることはな

い。かすかに聞こえる流水の音や、小さな生き物が息づく気配はあるものの、それらをまとめて塗り潰すほどの無辺の静けさだけが、背後の闇の中に迫ってくる。

おそらくは、この地の底の中で何千万、何億という時間が飲み込まれてきたであろう深い闇が、かすかなミニ八卦炉の明かりの境界のすぐ傍まで押し寄せてくる。

まるで自分の鼓動だけしか聞こえないような錯覚を覚え、ふと不安になったにとり顔が顔を上げれば。魔理沙はじつと、目の前の星琥珀を見つめていた。

「……すごいね、魔理沙は」

心からの感嘆を込めて、にとりは言う。

「正直、私はこんなところで、一カ月も頑張つてられないと思うよ。……あんな風に、言われながらさ」

言葉の最後には、小さな痛みを飲み込んだ。

確かに、幻想郷じゅうを探し回って、魔理沙は一億年前の世界を覗く方法を見つけ出した。けれど、この地の底の幅数十メートルのスロウグラスの中に、魔理沙の見た光景が映っているのかを確かめる術はないのだ。

いや、そもそも。ここに映っている光景が、真実一億年前のもののかすら解らない。いま、魔理沙が注力していることは、全てがあまりにも不安定な足場の上に築かれているもので、少し噛み合わせがズレれば、全てが

徒労に終わるのだ。そんなことは魔理沙も、口にはせずとも先刻承知のはずだった。

「どうなんだろうな。……意固地になつてただけかもな。案外」

ふいに身を起こした魔理沙は、星琥珀の傍まで歩み寄ると、べし、と軽くその上を叩いた。甲高い音を響かせて星琥珀の表面が震え、その奥に覗かせる太古の光景を揺らめかせる。

「でもな、そこで魔理沙さんはこう思うわけだ。

こいつはここで、誰にも見られないまま、ずうっとこうやって、一億年も前の世界を延々と映し続けてたってことだぜ？ ……じゃあ、やつぱり私が見てやらなきゃならんだろ、つてな」

地の底の、遙か過去の蒼空を振り仰ぎ。白黒の魔法使いは不敵に微笑んでみせる。

「無理かどうかは、私じぶんが決めることだからな。そうだなきや魔法使いなんて因果な商売やつてられないぜ。

……ま、何かが見えるまでは張り込むさ。我慢じゃないがそこまで辛抱強くないしな、何十年もここで物乞いやつてるわけにもいかないだろうが」

一息。

「やってる限りは手は抜きたくないからな」

「……魔理沙らしいなあ」

月行きロケットの時も。地底の核融合の時も。魔理沙は今と同じ顔をしていた。

もう戻れない、遙か昔の時間。今と切り離された『過去』の追憶の中に、魔理沙は誰かの背中を見ているのかもしれないと、にとり思う。

誰よりも真つ直ぐに――前を、前を見て飛ぶ魔理沙は、後ろを振り返ることを由としない。その背中を見守ってくれている誰かを信じているからこそ、魔理沙は、かつて教わった方法ではなく、自分の力で積み上げた魔法で、自分の願いを叶えようとしているのだ。

「一応やることはやってるんだぜ？ ほれ、願い事の叶う魔法。くじ引きで使えば吉が出やすくなる魔法とか」

「運頼み？」

「ぼーっと待つてるよりはいくらか前向きだろ？」

「だねえ」

悪戯っぽい笑顔で色とりどりのキャンディを広げてみせる魔理沙に、にとりも思わず、くす、と笑みをこぼす。

そうしてひとしきり一緒に笑い、心の中のわだかまりを笑顔に変えたにとりは、魔理沙の隣へと腰をおろした。

「――今日から私も一緒にするよ」

「いいのか？」

「見たいからね、私も」

「そうか」

じつと星琥珀を見詰めたまま、そっけなく答えて、黙り込む魔理沙。

「……………」

「……………」

けれどその気配が、幾分か和らいだ気がするの、きつとただの気のせいではない。にとりはその思うことにした。



二人が共に洞窟に籠るようになってから、さらに三日が過ぎた夜。……夜と言っても、星琥珀の光が途切れる時間なので、実際の朝昼とは8時間の時差があるが――とにかく、地下空洞に訪れた暗闇の中。

何の前触れもなく、ずん、と真下から突き上げるような激しい衝撃が、地下空洞を揺るがした。

寝袋ごと地面から30センチも吹き飛ばされた魔理沙は、地面に叩きつけられた激痛に跳ね起きる。

腕の痛みに目を見開けば、ランタンの灯りに照らされた天井の岩盤に、轟音を上げて大きなひび割れが走ってゆくところだった。

巨大な地下空洞が生き物の腸^{はらわた}のように激しく揺れうねり、施した補強資材をたやすく押し潰して、四方の岩盤が崩れ出していた。

「っ、なんだ!？」

「地震!？」

同じく飛び起きたにとりが、寝間着のままリュックからアームを操作して、崩れ落ちる岩盤を受け止めた。

なおも激しく揺れ動く地面は、立っているのが不可能なほど波打ち、地の底からの脈動に岩が、砂礫が、軋む音を立てて碎ける。

そんな中では、むしろ星琥珀も無事では済まなかった。光のない闇夜を映し出していた巨大な鉱石の柱に、無惨にも斜めに大きな亀裂が走り、澄んだ硬質の破碎音を響かせる。

「しまった……!!」

振り向いた先にそれを見て、魔理沙は叫んでいた。

不安定な地下洞窟が、たびたび小さな揺れを起こしているのは、探索の準備を始めた頃から、これまでも何度か確認していた。

当初はそれに対して慎重に対応していたものの、ここ2、3週間そうした異常はなく、地震とその崩落の可能性は、すっかり魔理沙たちの頭から抜け落ちてしまっていたのだ。

「油断したぜ……!!」

舌打ちとともに自分の迂闊さをのしる魔理沙。そうしている間にも、星琥珀の柱は斜めに傾いで、割れ砕ける岩の奥へと飲み込まれようとしている。

「くそ、星琥珀が……っ」

「魔理沙、危ない、こっち!!」

「っ」

地の底へ消えようとしている星琥珀へ思わず伸ばしかけた手を、にとりのアームが掴んで制する。

踏み出しかけた魔理沙の鼻先を、大きな瓦礫が震めて地面に激突する。ごうと巻き起る砂煙が、視界をさらに狭くする。

「魔理沙!!」

ほとんど絶叫のように、にとりが叫ぶ。

魔理沙はそれでも諦めきれず、崩れ落ちる洞窟の奥を凝視していた。けれど少女の視線の先、もはや底うもののない星琥珀はその形を失い、粉々の破片になって地の底へと沈んでゆく。

——瞬間。

まるで爆発するように、凄まじい閃光が地下の中に炸裂した。

「——っ!?」

「っ!?」

星琥珀^{スホウハク}の螺旋回路に閉じ込められていた、何千万年、何億年分の光が、ガラスの結晶組織構造の崩壊とともに一気に解き放たれたのだ。

まるで圧力を持つほどの、膨大な量の光が、一瞬で地下のあらゆる闇を駆逐し、白一色に視界を塗り潰す。

まともに見れば失明は免れなかったかもしれない。咄嗟に閉じた瞼の上からでも灼きつくほどに、鋭く激しく鮮烈な光が——魔理沙の身体を飲み込んでいた。

「……………!!」

しかし、それも一瞬のこと。吹き荒れた光が行き過ぎると、洞窟には深い闇が戻ってくる。

地震は緩やかにおさまり、後にはただ、荒廃したキャンプの痕が残るのみ。顔を覆っていたにとりが恐る恐る目をあけると、そこには茫然と立ち尽くしている魔理沙の姿があった。

「ま、魔理沙、平気!?」

「……………っ」

「魔理沙? ねえ、魔理沙?」

意志を亡くしたように棒立ちの魔理沙の肩を掴み、にとりは声を荒げる。が、魔理沙はやおらその手を振り払い、亀裂に飲まれかけていた箒を掴んだ。

「今のは——っ」

「ちよっ!? 魔理沙、どこいくんだった!! 危ないってばっ」

にとりの制止も構わず、箒に跨った魔理沙は、ありったけの速度で洞窟の奥へと飛び出していった。

地震は緩やかに終息し、大きな揺れこそ収まっていたが、まだ天井からはぱらぱらと細かい瓦礫が零れ落ちてくる。洞窟の壁や天井には無数の亀裂も走り、いつまた崩れ出してもおかしくない状況だ。

「……………っ!」

だが、魔理沙は速度を緩めない。

激しく高鳴る胸の鼓動が、言い知れない衝動が、少女の身体を衝き動かしていた。

目まぐるしく流れ過ぎた、数千万年の時の奔流。わずかに瞬で過ぎ去った膨大な光の洪水の中に、魔理沙は確かに見ていたのだ。

燃えるように朱い空。煙たなびく山にかかる分厚い雲。
それを引き裂いて天より墜ちる、巨大な彗星。

それは、遙か昔にあったひとつの時代の終焉。

そして——その光を、まるで崇めるように、心奪われるように群れ集い見上げている、何千何百という巨きな、大きな、旧き時代のいきものたち——

魔理沙はほとんど勘と無意識のままに、箒を操った。

狭くくねった洞窟を駆け抜け、地下水脈の流れ落ちる滝をくぐり、邪魔する木の根を引きちぎり、突き立つ鍾乳石の林に服をボロボロにして——ひたすらに、ただひたすらに。前へ。

前へ。

前へ。

……前へ！



どこをどう飛んだのか。数時間もそうしていたように

も思うが、実際にはほんの数分のことだったのかもしれない。

「……………」

魔理沙は、たどり着いたその先——洞窟の終着点となった行き止まりで、言葉を使い立ち尽くしていた。

先ほどの地震の影響か、洞窟の天井には大きな裂け目ができ、そこからは柔らかな陽が帯のように差し込んでいる。

その陽光が照らす洞窟の壁、そこにあったものを見つけ、呆然となった魔理沙の手から箒が落ち、からんと地面を転がる。

「やっと見つけた。魔理沙、一体どうしたん——」

ようやく追いついてきたにとりも、息を切らせて声を上げ——そのまま同じように、言葉を失った。

二人の目の前、見上げるほどに切り立った、巨大な岩壁に、巨大な生物の骨がはめ込まれていた。

雄々しく首を振り上げ、地面を踏み締めて、天に向けて吼え猛る姿。

『彼』は、かつて地上を支配し、繁栄を誇っていたことを誇示するかのように、巨大なその身体を深々と岩壁に刻みつけている。

「……………ははっ」

思わず、笑いすらこみ上げてくる。

莊嚴な姿の全身骨格。その巨大な骨の全てが、余すところなく、燃える炎のように、揺らめく波のように、美しく光を浴びて彩七色に輝いていた。

まるで、天を彩る星の煌き。

閃光^{フラッシュ}、髪飾り^{ヘアアクセ}、猫眼^{キャットアイ}、絵文字^{絵文字}、調色板^{パレット}、藁斑^{ストローク}、点火^{ピシファイア}、
靱殻^{シヤク}、斑模様^{ハムカモヨウ}。

踊り遊ぶ色鮮やかな輝きは、かつてその骨の持ち主が、
広大なる太古の大地を支配していたことを思わせるかの
ように、神々しく光を放つ。

「いや、いやいやいやつ。あり得ないよっ!？」

乾いたにとりの声が、洞窟に響く。

「こ、これ、本当に? ……そんな、だつて、化石が全身一揃い、まるまる見つかるんだって滅多にないことなのにつ」

驚愕から歓喜へと変わるにとりの声をそつと隣で聞きながら、魔理沙は帽子を取り、胸に添えて敬意を示しながら、『彼』に静かに頭を下げる。

億千万の夜を超え、命のように輝き燃え揺れる虹色彩の炎が、きらきらと踊る。

その身をすべて貴蛋白石化^{プレシヤスオパール}させた、一体の巨大な恐竜の全身骨格化石は、王の威厳を備えた偉大な姿で確か

にそこにあり。

何億年もの時を超え、遥けき古代に『彼』が生きた証を、確かに刻んでいた。



7

今日も変わらず、穏やかな博麗神社。桜の蕾もすっかり膨らみ、日毎春めく弥生月。この分では境内が花見に賑わうのもそう遠いことではないだろう。

ざわめく春の気配は、間もなく控えた例大祭も、例年になく盛大なものになることを窺わせる。

前祝いとばかり縁側に寝そべって杯をあおる萃香の顔は、すでにほんのりと朱い。その視線の先では、幾分興奮気味の文が、煎餅を齧る霊夢に熱弁を奮っていた。

「いやはや、今回はすっかり脱帽ですよ。いつ諦めるか賭けをしていたくらいなのに、あんなものを見つけれれば考えを改めざるを得ませんでしたね」

「……そうなの？」

「ええ。霊夢さんも一度見に行くべきですよ。あれは本当にいいものです！」

文の言葉は聞き流しながら、霊夢は薄い茶をゆつくりと啜る。その霊夢の隣ではさらに、ぺらりと新聞を広げ

た紫が、珍しく表情を緩めていた。

「星の命。貝の火ね」

「貝？ それは一体!？」

耳ざとくその独白を聞き付け、文は素早く手帳を開くと、紫の傍に駆け寄る。突き飛ばされた拍子に霊夢がお茶を被ったりしたが、それも気にする様子もない。

「――『これは有名な貝の火という宝物だ。これは大変な玉だぞ。これをこのまま一生満足に持っている事のできたものは今までに鳥に二人魚に一人あつただけだという話だ』」

どこかの物語の一説を語った紫は、ぱら、と開いた扇で口元を隠し、

「貝の火……虹色石は生物の身体から生じる石。言わば生命の火が、永い歳月に石の中に封じ込められて幻炎の形を成したもののね。」

赤、黄、青、緑。七に七を掛けた色彩に遊ぶように踊るその火は、遥か昔の生命が姿を変えて生じているの。その輝きはとても繊細で、焰のように年月によつて擦り減ってしまう。中でもとりわけ所有者の心には敏感でね、驕りや慢心、悪意を持てばすぐに濁り消えて砕けてしまうそうよ」

「ふむ。つまり魔理沙さんは、その宝珠を持つに相応し

かった、と？」

「さあ。それはどうですかしらね？ 因果は巡るもの。

吉吝凶悔^{きちりんきうかい}は世の常ですもの。見物はこれからかもしれない
ませんわよ？」

「……悪趣味なことやってんじやないわよ」

「あん。霊夢ってば酷いわ」

くすくす笑う紫の額にべしりと符を飛ばし、霊夢は小さく溜息をついて淹れ直したお茶を口に運ぶ。

「そろそろ、宴会の用意でもないといけないわね」

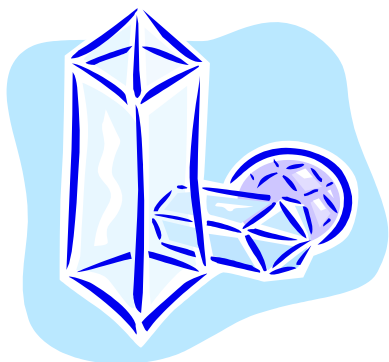
ほころび始めた桜の花の上、晴れやかな青空を笑顔で飛んでゆく春告精^{リリーホウセイ}を見上げ、霊夢はわずかに口元を緩めた。

本日の、文々。新聞の一面トップ。

珍しく学術趣味に偏った紙面の写真には、鮮やかな七色の輝きを波打たせる、巨大な巨大な化石と――

それを前に、河童と二人、肩を組んでVサインをつくり、誇らしげに胸を張る魔法使いの姿があった。

(了)



【あとがき】

はじめまして。そしてお久しぶりです。

お手にとつて頂きましてありがとうございます。銅おりはと申します。

活動を始めてちょうど1年となります本サークルの、タイトルに負けずだいぶん分厚い8冊目のSS本となりました『森の魔法使いと山の河童と、時間を停めた星の琥珀。』をお送りしました。

東方の主人公の一人である、普通の魔法使い霧雨魔理沙の「まだ見ぬもの」への探求心、彼女なりのアプローチの方法、彼女だけが持っている大切な魔法などを表現できていますかどうか。

本作は名作SF短編の『去りにし日々、今ひとたびの幻』と『光の大社員』2巻巻末の後書きマンガに着想を得て書いたお話となります。また、星琥珀の元となったスロウグラスを知るきっかけとなったのはスペースオペラTRPG『スターレジェンド』でした。

いずれも名作ですので、ご興味を持たれた方には、一読をお勧めします。『去りにし日々』は幻想入りして久しいサンリオSF文庫なんでものに収録されています、

SFマガジン総集編への再録以外では読むのはなかなか難しいと思います。

また、今回の時代設定、恐竜などの考証にあたり、SYS氏、生方一寛氏にご協力いただきました。いつもの通り監修には白身氏、Riza氏にもご尽力頂いております。ありがとうございます。

さて、そろそろこちらで紙幅も尽きてまいりました。拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

『森の魔法使いと山の河童と、時間を停めた星の琥珀。』
発行 平成22年3月14日 「博麗神社例大祭7」

オルハザカサンパンチ
折葉坂三番地

あかがね
銅おりは

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>
<http://members.jcom.home.ne.jp/oriha/index.htm>

